



Hikarivayo

Hikarivayo

24:00

まが起きまて

BanG Dream!fanbook  
Hatakewo Tagayasudake

R18



とっとうっ明日、  
誕生日だね〜

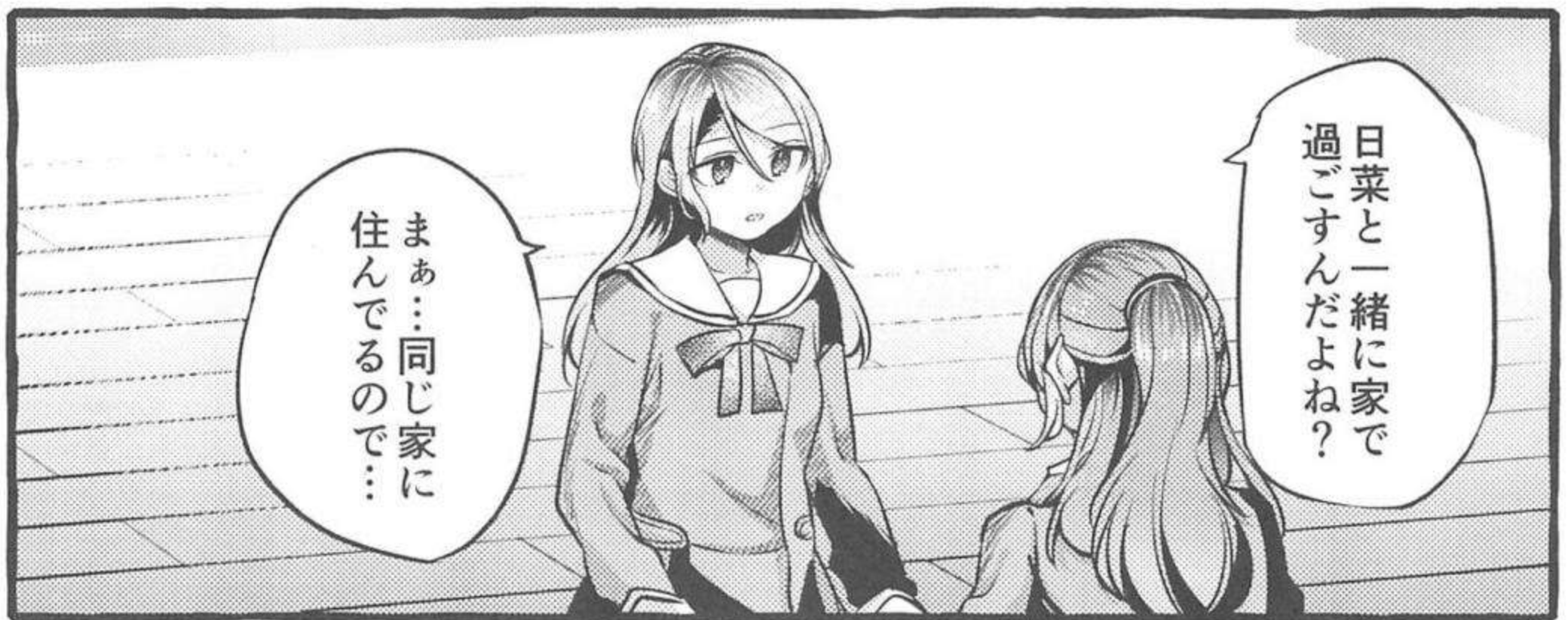
心の準備  
できてる〜？



別に伝える事に  
準備も何も  
ないですよ

プレゼントは  
用意しましたか

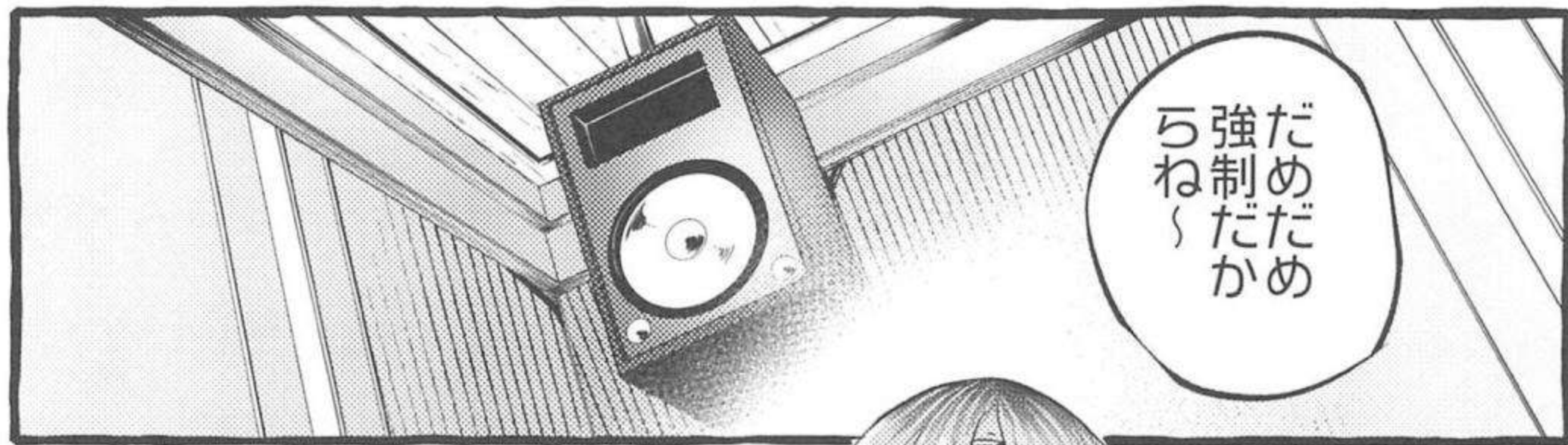
え〜  
もうちょっと  
何かある  
でしょ〜



日菜と一緒に家で  
過ごすんだよね？

まあ…同じ家に  
住んでるので…







日菜に対して

一線を超えた感情は  
自覚してる



キラキラ  
していて

無邪気で  
無垢な存在

そんなあの子が  
私を純粹な目で  
みてくる

一線を踏み越えるなんて  
私には出来ない



お誕生日前夜

これ全部  
おねーちゃんへの  
プレゼントだよ



お父さん  
お母さんには  
旅行に行つて  
もらいました！

ふふーん  
今日の日菜ちゃん  
は抜かりないよ



どこから突っ込めば  
いいのか分からない  
けど…怒られる  
から片付けなさい…







台所の下にあった  
ジュース飲んだ  
だけだよー



それは多分  
母さんが隠し  
てたお酒ね…



えへへへ

おねーちゃん  
可愛い



酔っぱらいの  
相手は苦手なの  
もう横になりな  
さい

グ  
グ  
グ

えへへ  
おねーちゃん  
いうならしかたが  
ないなあ



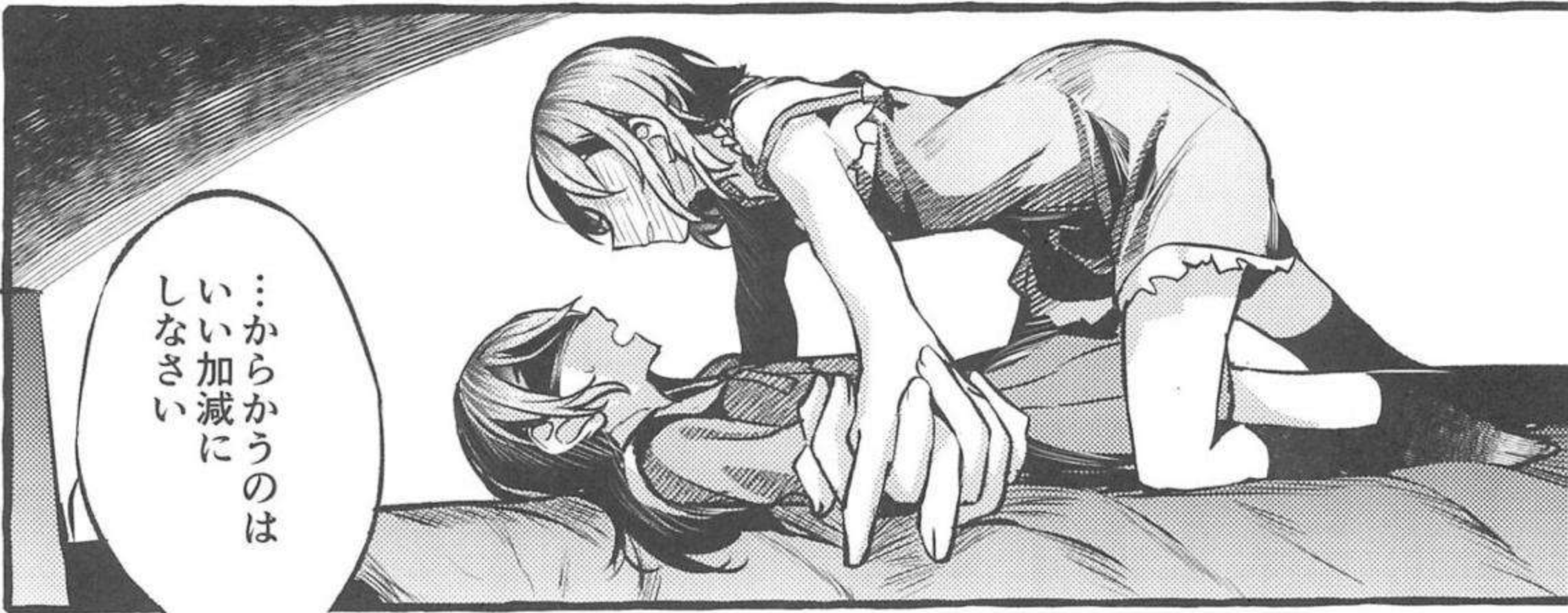
ド  
ド  
ド



ひひ、日菜の  
何してるの



なんかいい  
気分になった



：からかうのは  
いい加減に  
しないさい



あたしは  
本気だもん…



おねーちゃん  
だって分かって  
るでしょ？





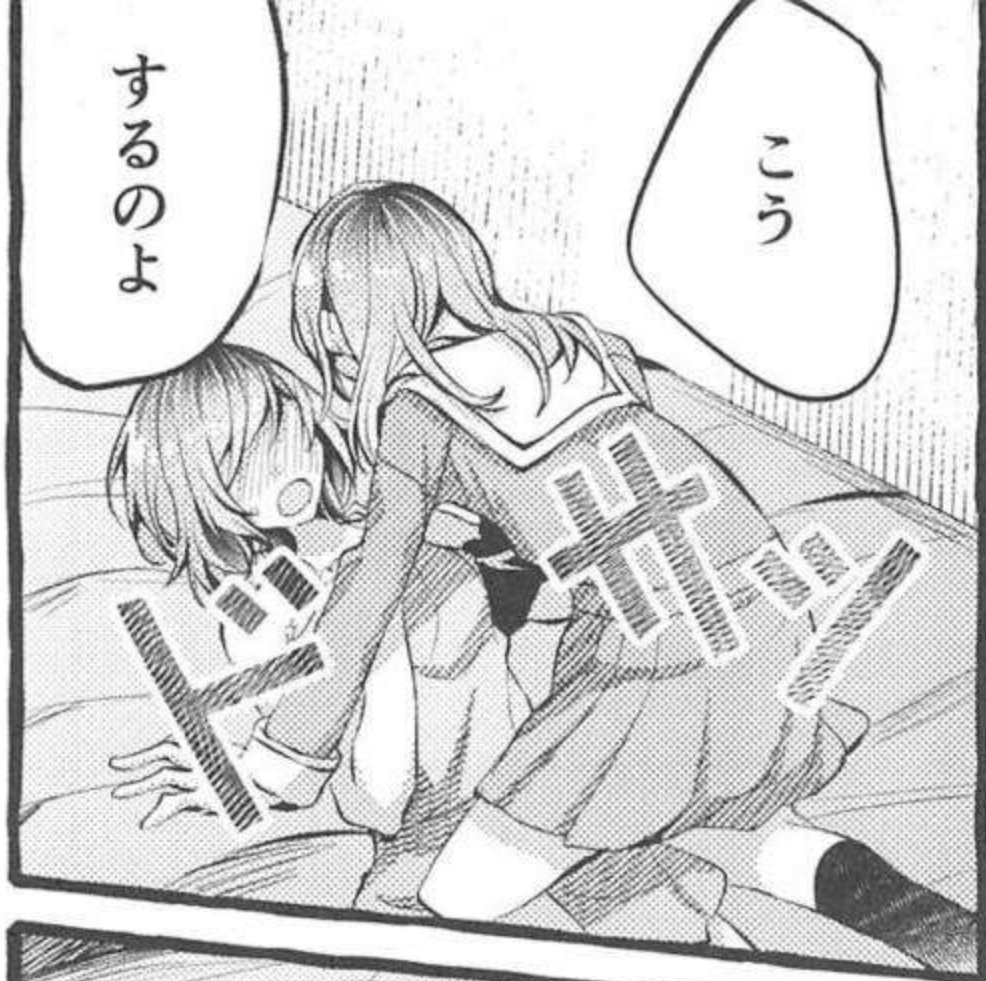
もうこれ  
以上は駄目よ

赦されないから...

なんで?



誰かに  
許されなきゃ  
してはいけない  
ことなの?



アッ

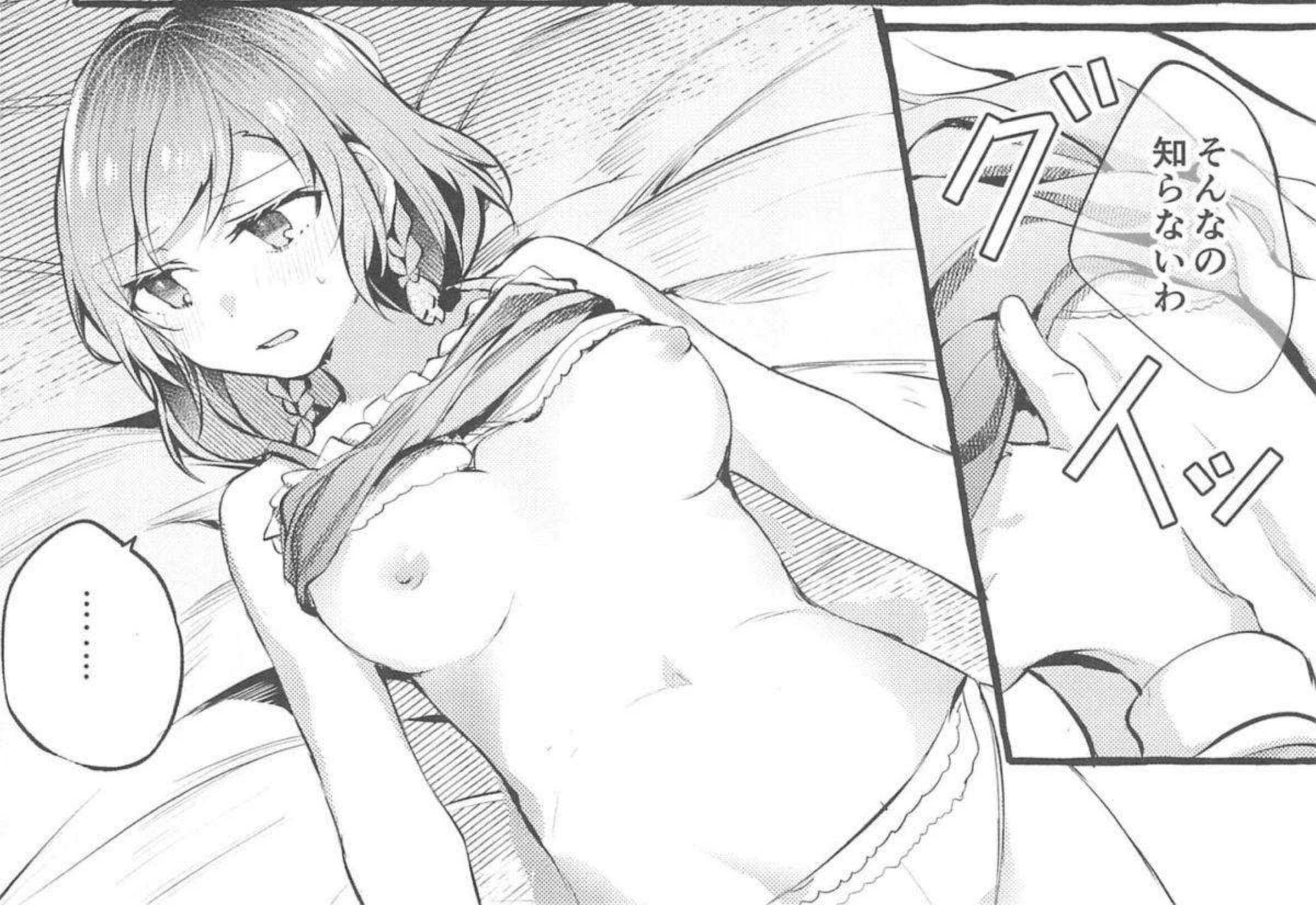
するのよ



そうじゃないわ

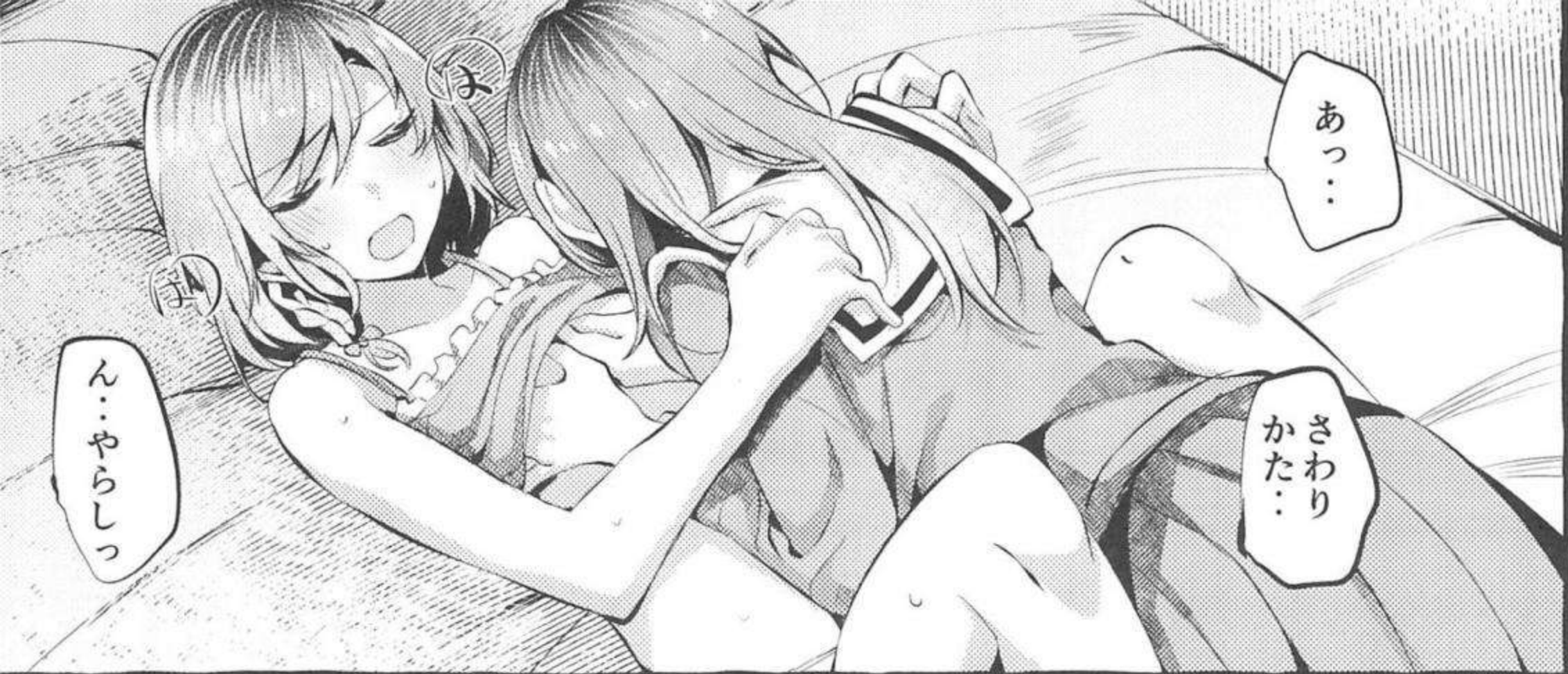


あたしが  
したいんが  
だけど...



そんなの  
知らないわ

.....



ん...やらしっ

あっ...  
さわり  
かた:



...日菜は  
どこ触って  
欲しい?



もっと...  
好きに...さわ  
っていいから...



私も脱ぐわ



そっちも  
触りたい…？



…ええ  
触りたいわ





日菜

可愛いわ…

んっ

んっ

あっ

あ

ズ  
ン

はっ…

んっ

んっ

んっ  
んっ  
んっ

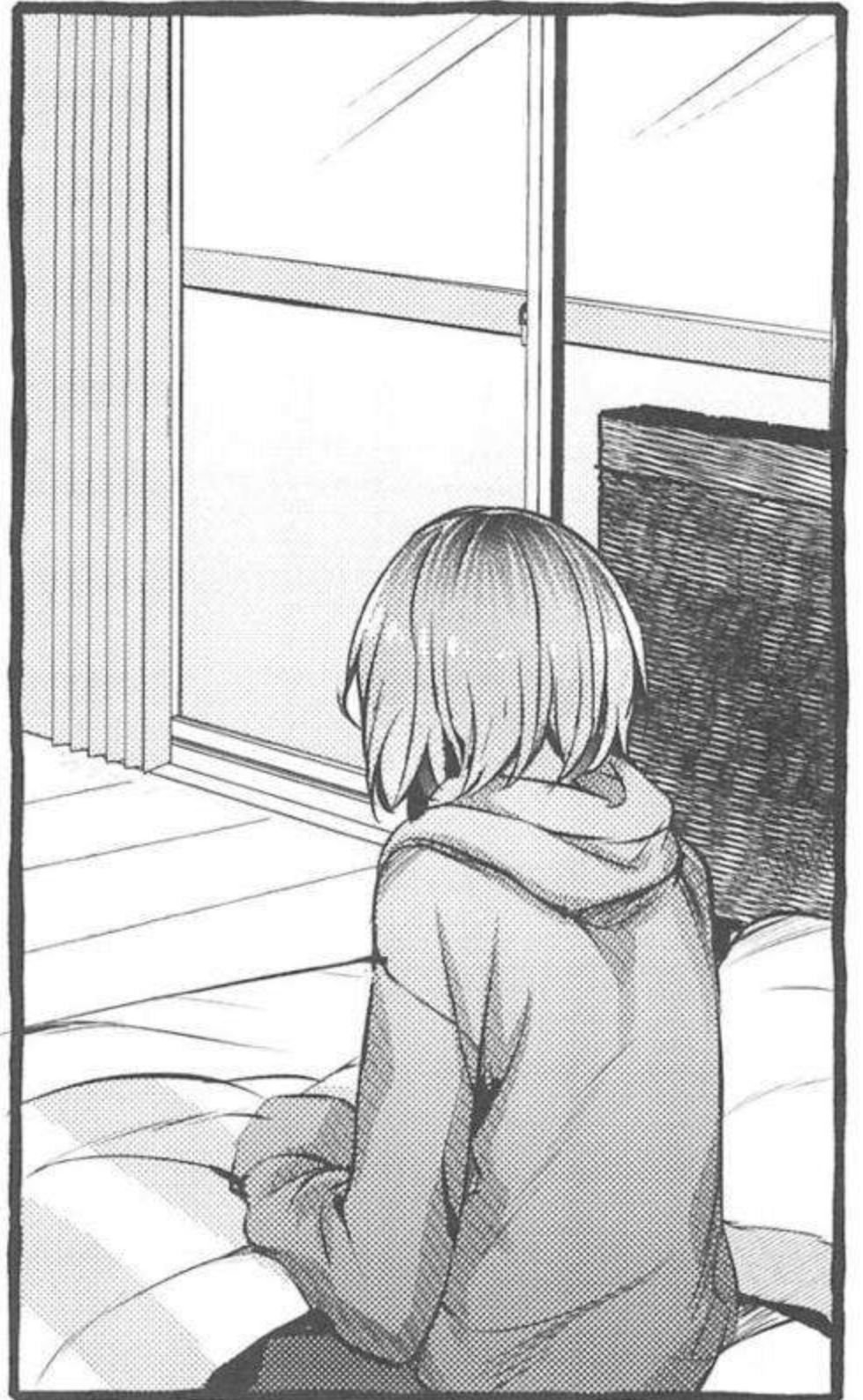
カキッ

GOAYA

00:00

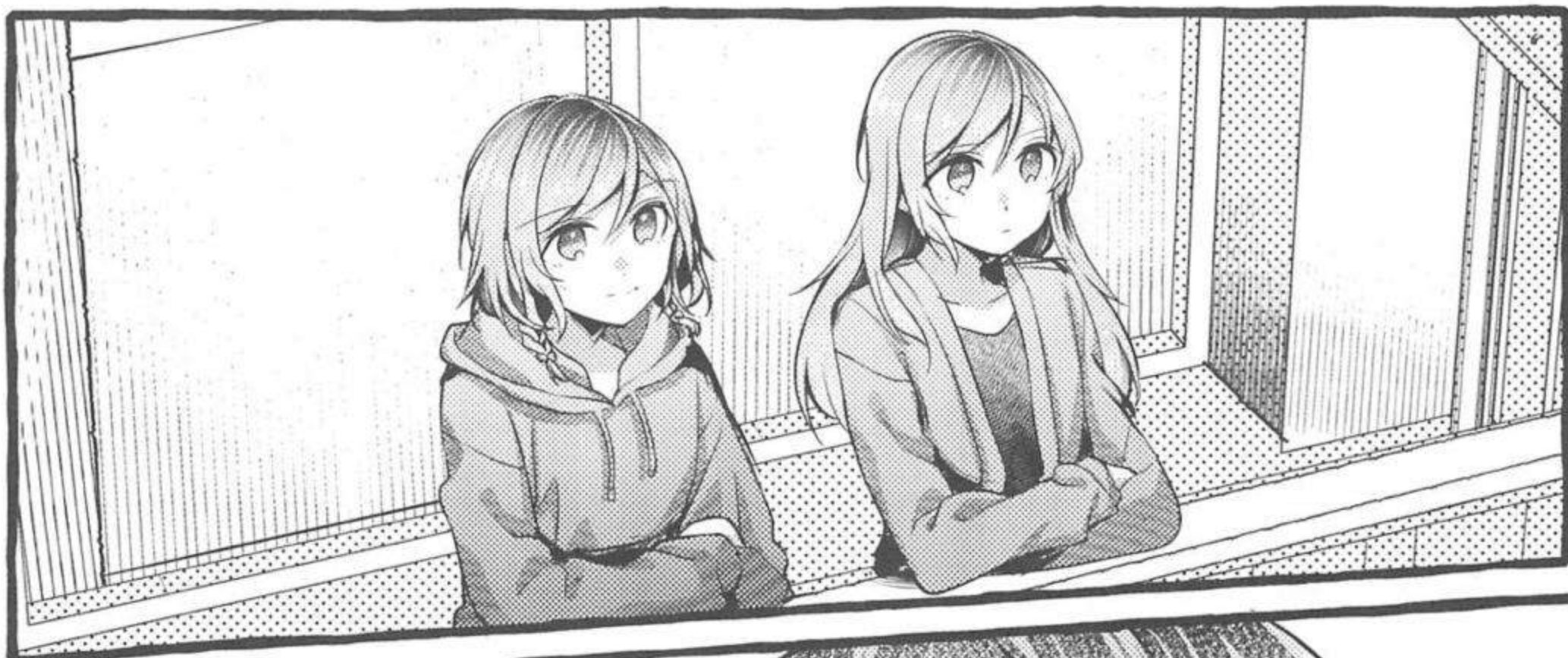
3:20

184



おねーちゃん…  
外寒いよ  
風邪ひくよ

星見れないかなって  
あなた好きでしょ



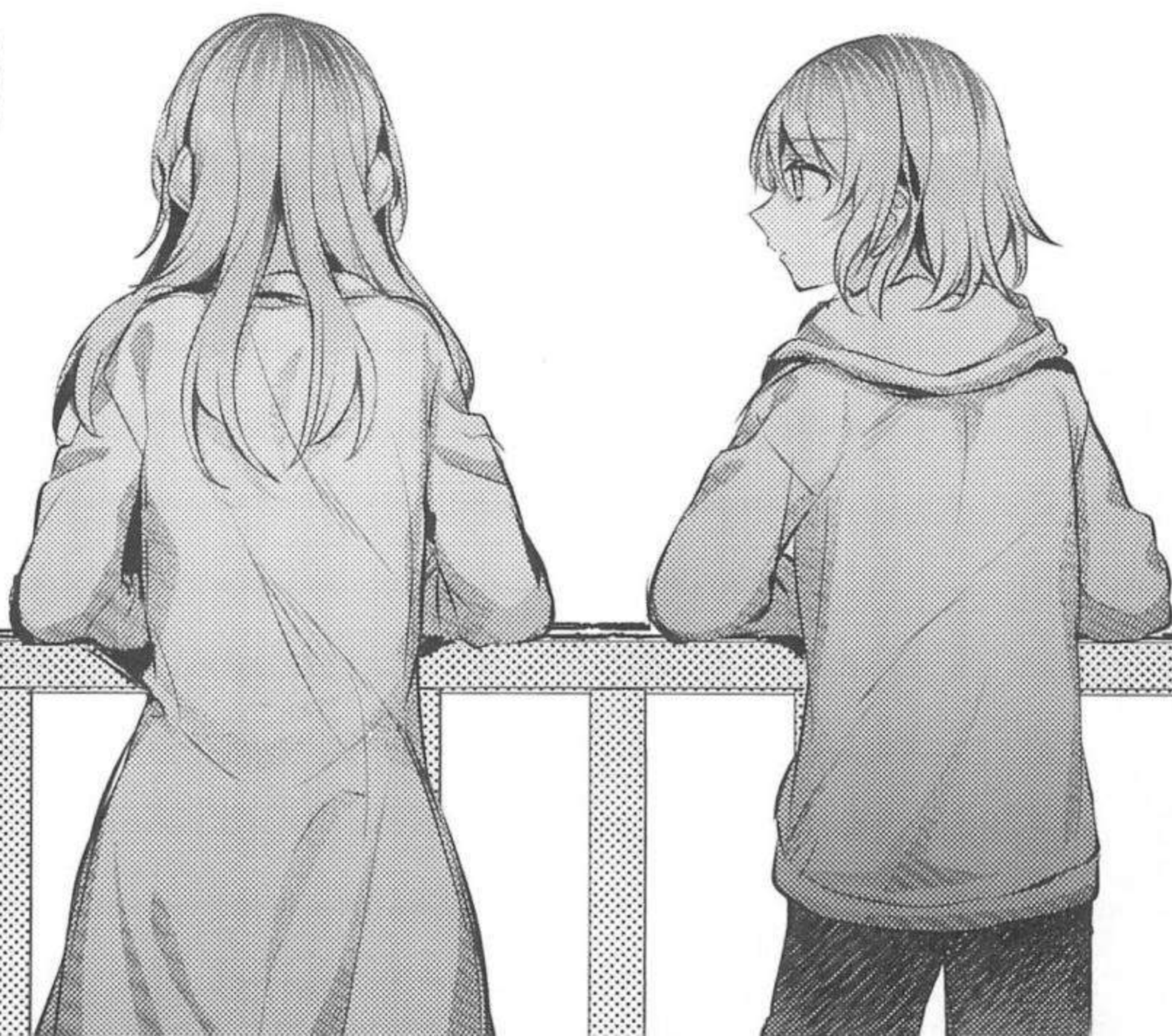


あなたの事も  
自制すべきだと  
考えたことも  
あったわ



でも

どうにも  
できないぐらい  
重症みたい



日菜が好きよ





…何で  
泣いてるのよ…

…泣いて  
ないもん

仕方ない子ね  
部屋に戻り  
ましょ

dait/guest/ss

その瞬間をあなたと

dair@dair1210

日付が誕生日に変わるその瞬間を一緒に迎えたい。

日菜が紗夜に対してこのお願いをするのは二回目だった。今から十年ほど前、夜は九時まで寝るのが当たり前だった頃。今日と明日の境目、日付が変わる瞬間には何か特別なことが起こるんじゃないか。幼い日菜は漠然とそんな風に考えていた。さらにそれが紗夜と日菜の誕生日である三月二十日という特別な時だったら、もっともって凄いい奇跡のようなことが起こるに違いない。それをどうしても確かめたくなくなった日菜は紗夜にしつこくお願いし、一緒に布団を頭から被り母に見つからないようにしてその時を待っていた。でも結局、いつの間にか二人とも寝ちゃったんだっけ。日菜の顔の横に紗夜が肘をつくときとベッドがぎしりと音を立ててきしみ、そこで日菜の思考は中断した。

「日菜……」

低めのトーンで呼ばれた声が耳に心地良い。紗夜が呼んでくれる自分の名前の響きが日菜は好きだった。夜と昼、なんて紗夜と対になる真逆の名前を嫌っていたこともあったけれど、今ではこの名前

以外考えられないと思える。ひ、な、ひな。もっと呼んでほしい、おねーちゃんの声で、あたしを。

紗夜が日菜にこうして触れてくれる時にはいつも、紗夜の口数は明らかに少なくなる。普段からおしゃべりな方ではないけれど、それでも最近では紗夜から日菜に話しかけてくれることも増えたし、日菜に何かを教えてくれる時などは饒舌になったりもする。でもこういう時は別だった。紗夜から発せられるのは日菜の名前くらいで、ごくたまに大丈夫？ 痛くない？ と聞いてくれるくらい。後は日菜から話しかけても短く返事を返すだけだ。愛を囁いて、とまでは言わないけれど、何でもいいから声が聞きたいと思う。紗夜が黙ってしまうと、日菜は不安になってしまう。紗夜の気持ちがわからなくなる。いつも必ず部屋を真っ暗にして、押し黙ったまま静かに触れて、そうして顔も声も隠すようにして、おねーちゃんがあたしに見せたくないことって何だろう。

「んっ！……はあ、おねーちゃん……好き」

「日菜……」

日菜は胸の頂を軽く撫でられただけでも声が出てしまうのに、紗夜から聞こえてくる声はたったの二文字だけ。ひ、な。そこからど

うにかして、日菜は紗夜の気持ちを感じ取ろうとする。楽しい時、悲しい時、怒っている時、呆れている時。これまでの紗夜の声を思い出していく。今のはどれに近かっただろう。普段の毅然とした感じとは違った。迷っているような、不安そうな、躊躇うような。日菜は思わず紗夜の首に回した腕に強く力を込めた。

「日菜……？」

「おねーちゃん、ねえ、おねーちゃん……！」

「ここににいるから」

安心させたかった相手に宥められるように頬に軽く口づけられて、それだけで日菜は誤魔化されてしまう。もつともつと触れてほしい。先程から紗夜の唇や指が触れてくれた全ての場所が熱い。朝だって昼だっていつだって紗夜に触れるのは嬉しいけれど、今こうして触れられることは特別な意味を持つ。夜遅くに二人きり、まっ暗な部屋のベッドの上で、二人とも寝巻きをはだけて肌を合わせて。「そういう意味」で、紗夜が日菜に触れている。恋しい人にこんな風にされていて、気持ちが昂らないはずがない。体が火照らないはずがない。

「もつと触って……おねーちゃん」

「どこがいいの？」

「えっ？ど、どこって……」

紗夜から質問を返されるのは予想外で、日菜は答えに窮してしまった。答えようが無いのだ。頭のとっぺんから足の指の先まで、紗夜にこうして触れられるだけでどこだってぴりぴりと快感の電流が走る。ほら、こうして胸の先に触れていた指が少しずつ下に降りて来て、お腹の辺りをやわやわと撫でさすり、腰骨の出っ張りを確かめるように一撫でして、それからさらに下へ降りていく。刺激自体が強なくても、ただ皮膚の上を通っていくだけでその一つ一つに反応して日菜の口から熱い吐息が漏れる。

日菜からの答えが無いのを姉への気遣いか何かだと受け取ったのか、紗夜はいっそう慎重に、一つ一つ確かめるように日菜に触れていった。日菜から上がる声が大きくなると紗夜はいちいち手を止めて、痛かったのかと確認するように日菜の顔を覗き込む。そんな風にされるとかえって焦らされているようで、ますます体が紗夜を欲しがってしまう。優しい手つきに紗夜の思いやりを感じ取って嬉しくなる反面、もつと勢い任せに痛いくらいにしてほしいとも願ってしまう。やっと下着を脱がせてもらった時には、すでにそこはぬるぬると濡れていて色濃く染みを作ってしまった。



「あつ、やつ、だめっ！ まだだめ」

「？ 駄目って、どうして……？」

「お、おわっっちゃうのやだ……」

日菜の懇願をどういう意味に受け取ったのか。紗夜は少しだけ手の動きを止めた後、むしろ積極的に指を動かし始めた。さつき探り当てられた、日菜が一番大きな声を上げてしまった場所を執拗に攻められる。ちゃぶちゃぶという水音が日菜の耳にまで聞こえてくる。きつと溢れたものでシャツも紗夜の手もべたべたに汚してしまっているだろう。そんなことを思うと火照った頬がますます熱くなる。紗夜は日菜にあてがう手はそのままにして、上体を起こして組み敷いた日菜を見下ろした。部屋が真っ暗で、しかも日菜の視界は涙で滲んでいるから紗夜の顔はよく見えない。でも何となく、目の前の紗夜は少し嬉しそうにしている。そんな風に日菜には思えた。ほどなくして降りてきた紗夜に嘯みつくように口づけられる。こじあけるように紗夜の舌が入り込んできて、それに応えて舌を絡ませる余裕もなくそのまま日菜はあっけなく達してしまった。

「どうして？」

「……んー？」

「どうしてさつき、あんなことを言ったの？」

結局日菜が時計を確認できたのは、びくびくと体を震わす余韻が少しずつ引いていき、乱れた呼吸が元通り穏やかに収まった頃。日付はとっくに変わっていて、もはやその瞬間がいつだったかもわからない。日菜が十分落ち着くのを待ってくれていたのか、しばらく経ってから紗夜にそう尋ねられると、日菜は少し恥ずかしそうにしながら答えを紗夜の耳元でそっと囁いた。予想通り、呆れ顔で大きなため息をつかれてしまう。

「本当に、あなたって子は……。変なことばかり考えるのね」

「変じゃないもん。誕生日は好きな人の胸に抱かれながら、なんてロマンチックじゃん？」

「全然わからないわ」

あっさり切り捨てる言葉に反して、日菜の腰の辺りを労わるように撫で続けてくれる紗夜の手はどこまでも優しい。その感触に身を委ねていると、日菜の方もどうでもよくなってしまった。

誕生日の前日も、日付が変わる瞬間も、そして誕生日当日も。いつだってあたしの隣には大好きなおねーちゃんがいてくれる。子供の

---

頃に期待したような奇跡は起きなかったけれど、あたしにとつては  
こうしておねーちゃんの隣にいられることが、何より大きな奇跡な  
んだよ。そう言葉にする代わりに、日菜は紗夜の唇へと誕生日二回  
目のキスを贈った。

---

寄稿 dait様  
みかん氏/畑を耕すだけ

印刷所 スズトウシャドウ様  
発行日 2020年3月20日  
mail mikanhata@outlook.jp

オークション販売・無断転載禁止